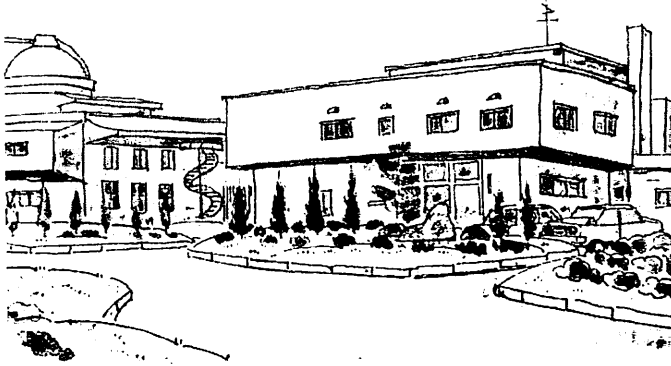


教育センターだより

第32号 (昭和59年3月)



目 次

巻頭言 「今日的課題」	1
昭和58年度秋田県教育センター所員研究 発表の概要	2～3
海外技術研修員について	3
昭和58年度東北・北海道地区教育センター協議会 並びに東北地区教育研究所連盟総会から	3
昭和58年度刊行物の案内	4～5
第18回全県児童・生徒理科研究発表大会	6～7
昭和59年度研修講座計画	8
随時研修実施状況	8

「今 日 的 課 題」



教育研究部長 塩 田 孝三郎

「いま、教育の現場には、どのような問題がありますか」、次年度の講座内容の参考とするため、研修講座受講のため来所された先生方に、私がよくする質問である。

この中で最も多く返ってくる答は、非行・落ちこぼれ対策と、関心・態度の評価に関するものであった。

非行・落ちこぼれがますます深刻の度合いを増し社会問題化していること、関心・態度の評価が改訂指導要録の特色をなしていることを考える時、当然予想される答かも知れない。

本県では、学校教育が目指すものとして、「豊かな人間性をはぐくむ」ことを中核にし、その中に「教師の力量を高める」施策を盛りこんでいる。

人間性豊かな児童生徒の育成を目指す学校教育、自己の力で生きていける社会人の育成を究極のねらいとする学校教育において、非行・落ちこぼれと関心・態度の両者は、一見別のことのようにでありながら、自己育成力を共通の課題として、密接に結びついた不可分の関係にあるように思う。

教師の資質には、専門的知識・技能に関する能力と実践していく能力の二面があるという。これは当然のことであり、要は、この両面が一体となり、児童生徒

に対して、実際に生きて働いているか否かである。

変化のめまぐるしい現代社会に生き抜いていかねばならぬこれからの児童生徒にとって、最も重要なことは、学校で習得した知識を財産として保持していることではなく、その人生を通して、その時、その場をきり開いていく「自己育成力」を、学校教育の中で身につけることであろう。

生涯を通して学習を続けていく力の源泉は、学校時代、成績の上下は別として、その教科が好きだったということ（好意的態度）にある。

学習に対する態度の非好意的な児童生徒を、好意的な方向へと変容させる教授・学習過程の構築が、教師の指導力であり、教師の力量であり、それを高めることが研修の基本でなければならない。

その教科が好きであるかどうかは、教師の態度と結びつくものであり、豊かな人間性をはぐくむことをねらいとする学校教育においては、教育の成果を評価する上で、大きく位置づけられるべきものと思う。

関心・態度の評価は、非行・落ちこぼれを包含してまず教師自身、自己の態度が児童生徒にどのような影響を及ぼし、どのような態度を形成してきたかを検証し、自己評価するところから始めるべきではなかろうか。

昭和58年度 秋田県教育センター所員研究発表の概要

今年度の所員研究発表会は、県内教育関係者約160名を迎え、2月3日当教育センター並びに特殊教育センターを会場に開催された。

7名の所員が、学校経営・教科学習指導・特殊教育・領域上の諸課題等当面する学校教育上の諸問題について日頃研究した成果を発表し、活発な意見交換がなされた。

以下、当日の発表テーマと研究内容の概要について紹介する。(詳細は後日刊行の「研究紀要第15集」に掲載)。

中学校教師の学校経営に対する参加意識について

経営研究室 研究員 笹木 政美

現在、教育を取り巻く条件がますます多様化する中で、学校としての使命を果たすためには、全職員がそれぞれの立場で責任をもって学校経営に当たり、学校の教育機能を十分に発揮していくことが大切である。

本研究は、県内の中学校教師を対象に、学校経営に対する参加意識はどのようになっているか、その実態を明らかにするため、学校教育目標とのかかわり、職員会議への参加状況、校務分掌への取り組み、校内研修の意欲の4領域と教職のやりがいについて調査した。これを基に、学校規模別、職位別、性別、年齢別によって、学校経営の参加意識に差異があるかを比較・考察し、学校経営改善の参考資料とするための調査研究である。

国語に対する態度を測定するためのSD型測定用具の開発

教科研究室 指導主事 須釜 宣夫

豊かな人間性を育てることをねらいとする学校教育においては、関心・態度がその中核的課題として重要な意味を持っている。

知識・理解、技能などの認知面の能力に関する実証的研究に比べて、態度のような測定しにくい情意面の研究は、積み上げのほとんどなされていない領域の一つであり、その研究もいまだ試論の域を出ていない。

情意面に関する実証的研究をすすめるには、測定(資料)する面と育成(実践)する面の両面からのアプローチが必要である。情意面の能力、特に関心・態度を育成する基礎資料を得るため、国語に対する態度を測定するためのSD型測定用具を開発した。



授業分析のためのパーソナルコンピュータ・プログラムの作成

教育工学研究室 研究員 村川 慎一

パーソナルコンピュータの普及により、学校教育への利用も年々盛んになってきている。本県においても、小中学校での利用は個人も含めて、10%を超えている。

そこで、短時間で複雑なデータ処理を可能にするコンピュータの機能を生かし、日常的に活用し得る授業分析のためのプログラムの作成と分析を試みた。

授業分析には様々な手法があるが、ここでは学習効果を授業過程の各分節に位置づけることによる授業の改善を目指し、事前テスト、事後テストの応答表にS-P表で用いられる並べ替え操作を行ったPr-Po(S-P)応答表と、授業過程をグラフ化した時系列振動グラフによる分析を行ったものである。

水生生物の教材化に関する一考察

— 小・中・高の関連を図って —

理科研究室 指導主事 藤井 信

小・中・高における生物領域の学習指導内容を、体系的、適時性、順次性の観点でとらえて整理を試み、学習指導計画の作成に当たって、小・中・高の学習指導内容の具体的な関連が容易に把握できるように一覧表にまとめている。

また、自然を調べさせることを重視し、プラナリアを素材とした野外観察、メダカの飼育を中心とした調和水槽並びにメダカの発生観察実験、カナダモなどの水草を用いた光合成の実験、そしてミジンコによる走光性の実験などを工夫し、小・中・高の指導内容に位置づけてまとめ、これらの水生生物が小・中・高を通して多目的に活用できることを例示している。

大気の大循環に関する教材・教具の作成とその活用

— 理科研究室 研究員 佐藤 伸雄 —

自動車のワイパーモーターを使った電動回転台及びワイヤレスTV送信機をつけた回転TVカメラ台を自作し、これらを使用して、回転水槽による大気の大循環モデル実験を行った。この方式では、実験操作が容易であり、画面には、回転台は静止し、運動体の動きだけが認められるので、視覚にダイナミックに訴えながら指導できる。この方法により、北半球中緯度地方の気象に大きな影響を与えている偏西風を主にした内容を実験的に取り上げ、中学校では、天気変化の規則性などの仕組みを総合的に取り扱うことができるよう、また高等学校では偏西風のメカニズムを解明できるよう、それらの教材に関する実験法について検討した。

自閉児の課題学習について

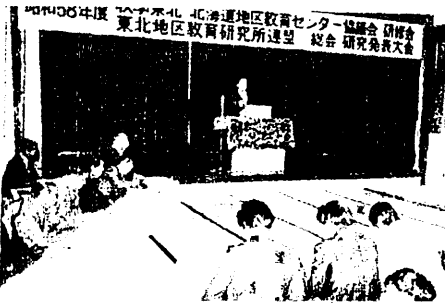
— 教育相談研究室 指導主事 品川 大 —

(概要については、特殊教育センターだより「すずしろ」5号をご覧下さい。)

昭和58年度

東北・北海道地区教育センター協議会並びに
東北地区教育研究所連盟総会から

上記の会が、本県の主管により、八幡平湯瀬温泉を会場として、去る10月27、28日に開催され、国立教育研究所主任研究官、有本良彦先生はじめ、各道県教育センター所長、所員、東北地区教育研究所員等63名が参加した。第一日目は、共通研究主題による研修会で、山形、宮城の両県から口頭による研究発表や、当センター経営室長、高橋富美雄を含む4題の紙上発表があり、第二日目には、管理運営協議会と並行して、大瀧村教育研究所、戸部四郎先生を含む5題の研究発表等があり、活発に意見が交換された。最後に有本先生の「育つものと学校の役割」と題する講演を頂き、大きな成果を上げて終了した。



原動機模型の製作と活用に関する一考察

— 技術家庭研究室 指導主事 倉泉 喜久雄 —

中学校技術・家庭科機械領域では、実践的活動を通して、機械の仕組み及びエネルギー変換と利用について理解させることを目標としている。さらに、原動機の発達の歴史を通して、機械の発達がいかに人間生活を豊かにしてきたかを知らせることとしている。

原動機は、エネルギーを変換して動力を発生する機械であり、原動機について理解することは、機械学習の目標達成につながることである。

このことをふまえて、本研究では、エネルギーの利用と原動機の発達、原動機模型の製作と活用について研究を進めた。製作した模型は、反動式及び衝動式タービン、蒸気機関、2サイクル機関の4種類である。

— ホンジュラス共和国から海外技術研修員来所 —



秋田県では、発展途上国及びこれに準ずる地域から技術研修員を受け入れ、必要な技術を習得させると共に県民との接触を通じて、その国や地域の文化・経済等の発展と繁栄に貢献している。

この事業の一環として、昨年7月から今年3月までの9か月間、ホンジュラス共和国から高等学校(国立小学校教員養成学校)の理科教師オスカル・エドガルド・ウルピナ・ベントウラ先生(27才)が来所し、主として、小・中学校の理科教育について研修を行っている。逸速くこの秋田の地や教育センターに慣れ、厳冬の寒さにも負けず意欲的に理科の観察実験法や学習指導法について研究をし、現在、理科の観察実験書を作成中である。この11月5日長男誕生の報を受け、公私共に充実した毎日である。母国での今後の活躍を心から期待したい。

昭和58年度 刊 行 物 の 案 内

「観点別学習状況の評価」の実際

新指導要録の「観点別学習状況」の欄に対処するため、その評価の取り扱いが課題となっているが、当教育センターではプロジェクトチームを編成して、理論と実際の両面から研究を進めてきた。57年度はその成果として、「観点別学習状況と評価」の進め方を刊行し、評価手順や評価方法を明確にした。58年度はその続編ともいべき実際編を刊行する予定である。その内容は、各教科毎に実践例をあげ、実際の場での評価活動や判定例を提示したもので、特に関心・態度の観点については、全教科の評価例を示してある。

各教科の内容は次の通りである。

1. 国 語（理解能力と関心・態度の評価例）
2. 社 会（資料活用能力と関心・態度の評価例）
3. 英 語（能力、関心、態度の評価例）
4. 音 楽（表現、鑑賞の能力と関心・態度の評価例）
5. 図画工作（表現能力と関心・態度の評価例）
6. 数 学（数学的な考え方と関心・態度の評価例）
7. 理 科（活動を通じた思考と関心・態度の評価例）
8. 技術・家庭（電気1の技能と関心・態度の評価例）
9. 保健体育（バレーボールの技能と関心・態度の評価例）

秋田県郷土教育資料歴史学習編
郷土の歴史と文化

中学校及び高等学校の学習指導要領では、歴史学習において郷土（地域）の歴史や文化を取り上げていくことの必要性が強調されている。

まもなく刊行される『郷土の歴史と文化』は、この学習指導要領の方針を具体化したものであり、創意と工夫をこらした学習指導の展開例と多様な資料を豊富に収載・提示し、県内各校の歴史学習の実践に役立ててもらおうとするものである。

また、本書は、特設単元における郷土の歴史の学習やフィールドワークによる郷土史学習、博物館利用の郷土史学習についても、その研究の成果を収載するので、ぜひ有効に活用していただきたい。

本県及び東北各県の生徒指導に関する
研究の動向についての調査研究報告書

今日の課題である生徒指導についての研究をさらに深めていくため、今年度から特殊教育センターと共同のプロジェクトチームを設けた。研究一年目の今年度は、本県を含む東北各県で刊行された生徒指導に関する研究物を収集、整理し、おおよその動向をつかむとともに、これからの研究の方向を探ってみた。その一部を次のような報告書としてまとめ、刊行する。

1. 東北及び本県の生徒指導研究の動向
（おおよその動向や研究の実際を紹介する）
2. これからの本県の生徒指導に望まれること
3. 資 料
（過去十数年間の本県における生徒指導指定校一覧や当教育センターでの研究テーマ一覧表）
また、生徒指導に関して、特殊教育センターより「荒れ・すさみ —— 子供の荒れ・暴力を考える ——」と題するガイドブックが近く刊行されるので、併せて活用下さい。（詳しくは、特殊教育センターだより「すずしろ」を参照して下さい。）

小学校複式学級の学習指導
第3・4学年用 — 国語、社会、算数、理科 —

小学校複式学級の学習指導は、多くの問題を抱えながらも、各学校の積極的な実践研究の推進により、その特性を生かした教育活動が展開され、問題解明がなされてきた。

当教育センターでは、これら複式学級のもつ多くの問題を解決するために、その学習指導資料として、これまでに「国語編」、「社会編」、「算数編」、「理科編」、を刊行してきた。

今年度は、複式学級担任が、日常の授業を効率的に実践するための学習指導資料として、学年編を刊行することにした。これは、複式学級における学習指導として、中学年（3・4年）の国語、社会、算数、理科の四教科について、学習指導上の問題と留意点、年間指導計画例、学習指導の展開例、教育機器の効果的な活用例などを、総合的にまとめたものである。

野外観察の手びき 生物編（動物）

当センターでは、「野外観察の手びき」として昭和46年度に「地学編」を、昭和50年度には「生物編（植物）」を刊行している。これに続くものとして、「生物編（動物）」の刊行が待たれていたが、昭和56年度から3年間にわたって理科学習における動物素材の研究、資料の収集が続けられ、このたびようやくまとまり「野外観察の手びき生物編（動物）」として発行したのはこびとなった。

これまで動物素材に関する野外観察の手びきとしては、「野外観察指導の手引—秋田県の生物と地形・地質—」（昭和32年度）が、資料集としては、「秋田県郷土教育資料・生物編」（昭和42年度）があり、いずれも当センターの前身である教育研究所から刊行されたものである。

前者は県内に産する代表的な動・植物を図示したものの、後者は同じく代表的な動・植物を系統的に配列して解説したものであった。

本書は、身近な自然からの直接経験を重視する理科教育本来の理念と、郷土の自然を愛し大切に扱う調和のとれた豊かな心情を培う趣旨から、郷土の自然を四つの環境別に分け、そこに生息している動物素材について300枚以上の写真を用い観察の要点をとらえて解説したもので、学校関係者以外にも十分役立つ内容となっている。

中学校理科実験観察カード 第8集（教材編）

理科教育充実のため継続的に「理科実験観察カード」を発行しているが、今回は中学校教材編第8集を発行し、各中学校へ配布する。本書は、基礎的な観察、実験や新しい観察、実験等に必要な資料をカード式にまとめ、理科学習を能率的、効率的に指導するためのガイドとして作成した。取り上げた題材は、昭和56年度の学習指導要領の改訂にそった次のような第1分野、第2分野に関するものをそれぞれ数題選んで記載している。内容としては、題材について、ねらい、準備、方法、まとめ、指導上の留意点、参考資料等を取り上げ、授業の中で活用し易いように編集してある。

- 物体の運動の記録
- 物質の燃焼
- 化学変化における質量の保存について
- 根の成長と体細胞分裂
- 光合成に関する観察、実験
- 1983年日本海中部地震

研究紀要 第15集

昭和58年度秋田県教育センター・秋田県特殊教育センター所員研究発表会の研究論文7編（学校経営に関するもの1編、国語科教育に関するもの1編、教育工学に関するもの1編、理科教育に関するもの2編、技術・家庭科教育に関するもの1編、特殊教育に関するもの1編）を収載し、本県教育の振興の一助にしようとするものである。3月下旬に刊行されることになっているので、学校教育推進のために活用されるようお願いしたい。

研修集録 第15集

今年度、5月から9月までの5か月間、当教育センター及び特殊教育センターで研修された、小学校4名、中学校6名、高等学校2名、特殊教育学校1名、計13名の方々の研修成果をまとめたのがこの集録である。

研修テーマは、県の重点目標や、学校現場の切実な課題を踏まえたものばかりで、研修内容もそれぞれが現場の実践につながる労作である。各学校で、今後の指導に生かすよう、十分に活用していただきたい。

件名目録 第16集

情報化社会と呼ばれている今日、教育に関する情報は数多く刊行されているが、学校や教育機関・教育研究団体等を出している資料は一般に入手が困難である。

当センターの図書資料室では、全国から貴重な研究物をはじめ、たくさんの教育関係資料を収集し、県内の先生方の教育研究や校内研修に役立つよう努めてきている。これまでに、6,500点近い図書資料と11,000点以上の教育資料を分類・整理してある。

今回、昭和58年内に収集した、研究紀要・研修集録等の資料内容を、所定の件名——A（教育一般）～M（C大学紀要）の13項目——により分類し、「教育研究資料件名目録 第16集」として刊行することになった。また、学習指導プログラムや学習シート等のソフトウェア件名目録を巻末に集録した。

なお、県内の各学校で研究紀要や集録等の研究物を発行した際には、是非1部寄贈していただければ、多くの方々の参考になるので、ご協力をお願いしたい。

第18回 全県児童・生徒理科研究発表大会

第18回全県児童生徒理科研究発表大会は、当教育センターと県教育研究会理科部会、県高等学校教育研究会理科部会の共催により、当教育センターを会場に昨年11月7日(月)～9日(水)の3日間にわたって開催された。研究発表者並びに発表題は下記の通りである。

次に、各会場における指導助言を中心に目立った点を幾つか挙げる。小学校では、①生物に関する研究が多く、極く自然な形で対象物に接している。②発想が多面的で豊かな情操の一面がうかがえる。③地域に根ざしたテーマをみつけ、訴えるものが多い。中学校では、①研究の視点を明確にし鋭く掘り下げている。②生物領域の研究では、「生命を大切に作る心」が随所にみられる。③物理的内容を取り上げた研究が少ない。④生徒間の質疑が少ない。専門性の強い方法や内容等については分かりやすい説明を工夫したり、訴えを強めていくような配慮がほしい。高等学校では、①研究対象として、生活に密着した自然、地域の特徴をとら

えた自然がクローズアップされ、その地域の話題などに科学のメスが入られるようになってきた。②例年のように、限られた学校からの研究発表が主力を占め、発表件数が少ない。

更に、本年度の大きな特徴の一つに日本海中部地震に関する研究が挙げられる。小学生の地震波の伝ばと地形の関係のモデル実験から高校生の震度分布図の作成まで、いろいろな角度から今日的话题にメスを入れ注目された。また、一般の子供たちが身近にありながらあまり意識をしていない河床の石ころの下の生物や土の中の小動物の世界に積極的に目を向け、生命の驚異を訴えるなど、理科教育が目指す豊かな自然観は着実に育ちつつあることを感じ取ることができた。

これらの貴重な研究を継続している児童・生徒に敬意を表するとともに、これらの研究を支援してこれらのご家族の方々や諸先生に心から謝意を申し上げます。

＝ 小学校の部 ＝ (11月7日)

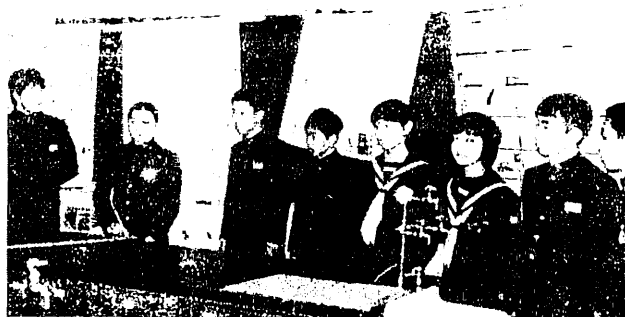
- | | | | |
|--------------------------------|------|----------------------|------|
| 1. 家の近くに来る小鳥 | 花輪小 | 21. 冬をこしたキアゲハさん | 秋大附小 |
| 2. じゅ液や光に集まる虫の観察 | 〃 | 22. カビはどこでどのようにふえるか | 〃 |
| 3. アリとあそんで | 〃 | 23. かいわれ大根のもやしのせいちょう | 明徳小 |
| 4. しみこみ実験 | 小坂小 | 24. カブト虫日記 | 中通小 |
| 5. 物のころがり方の秘密 | 二ツ井小 | 25. 海岸の地下水の塩分について | 旭川小 |
| 6. うろこの研究 | 観海小 | 26. 波の進み方の研究II | |
| 7. 果物の研究(第三報) | 湊城二小 | 海岸の形と波の高さについて | 港北小 |
| 8. 空気中のカビの研究(第三報) | 〃 | 27. かたつむりの研究 | 鶴舞小 |
| 9. カビの観察 | 湊城三小 | 28. たんぼぼの観察 | 〃 |
| 10. 塙川地区に見られる化石の研究
(第三報) | 塙川小 | 29. 石の下の小動物 | 〃 |
| 11. 光に集まる虫 | 飯田川小 | 30. イネの成長 | 〃 |
| 12. 大提沼のヒシの研究 | 〃 | 31. ナメクジの観察 | 〃 |
| 13. ありの食べ物 | 大潟小 | 32. カイコの飼育と観察 | 新山小 |
| 14. カビが生えるための必要な条件 | 〃 | 33. 生き物と人間の力くらべ | 大曲小 |
| 15. 馬踏川周辺の地震被害について | 大久保小 | 34. 星の動き | 〃 |
| 16. 脇本地区の薬草研究 | 脇本一小 | 35. ヒメギフチョウ3年間のまとめ | 〃 |
| 17. シジュウカラの観察 | 〃 | | |
| 18. チョウの目から見た世界と人間の目
から見た世界 | 〃 | | |
| 19. 魚や貝の年令しらべ | 船川南小 | | |
| 20. カマキリの研究 | 船越小 | | |



- | | | | |
|--------------------------|------|------------------------------------|------|
| 36. 紙の種類による水の吸収性 | 花館小 | 44. カビの研究 | 白山小 |
| 37. 清水の水源はどこか | 六郷東根 | 45. 羽後町上到米の地形の変化について | 上到米小 |
| 38. 肥料成分によるイネの成長の研究 | 四ツ屋小 | 46. アリジゴクの観察(その4) | 湯沢東小 |
| 39. 黒川地区を形成させたレキはどこからきたか | 黒川小 | 47. 太陽熱利用
(手作り温水器をめざして) | 湯沢西小 |
| 40. トンボの飛行 | 横手南小 | 48. 天気しらべ | 〃 |
| 41. 紙の強さと形による強さ | 〃 | 49. 林の中の虫たち(Part 1)
くさった物にあつまる虫 | 中山小 |
| 42. 旭岡山と郷土館に住む虫 | 〃 | 50. 魚の体色変化 | 三梨小 |
| 43. クモの観察II | 朝倉小 | | |

＝ 中学校の部 ＝ (11月8日)

- | | | | |
|---------------------------|-------|---------------------|------|
| 1. プラナリアの再生についての一考察 | 鷹巣中 | 22. 郷土の地層とその構成物質の研究 | 大曲西中 |
| 2. 綴子川のプラナリアの分布状態 | 〃 | 23. ツユクサの茎の動きについて | 大曲南中 |
| 3. スズメの巣に関する研究 | 合川中 | 24. 六郷清水に関する一考察 | 六郷中 |
| 4. 米代川のプランクトン調査 | 能代一中 | 25. 河川底生動物の季節変動と生活史 | 中仙中 |
| 5. 自転車リムを利用したプリセッション運動の研究 | 藤里中 | 26. 郷土館の白土の研究 | 横手南中 |
| 6. 突沸について | 船川中 | 27. 郷土館の土壌生物 | 〃 |
| 7. 過酸化水素水の分解について | 〃 | 28. 水圧の研究 | 鳳中 |
| 8. ペルセウス座流星群の観察 | 樺中 | 29. シダの生育と環境 | 〃 |
| 9. 旭川の微生物(第二報) | 秋田東中 | 30. 微生物の研究 | 雄物川中 |
| 10. 虫の敵から身を守る能力 | 〃 | 31. オオバコの性質の研究 | 十文字中 |
| 11. ウキクサ類の根のしくみについて | 土崎中 | 32. 校地の植物 | 湯沢南中 |
| 12. スイレンの気孔について | 〃 | 33. 根の形と成分について(その2) | 〃 |
| 13. ペルセウス流星群の観察 | 秋田北中 | 34. 湯沢市弁天地区の地層について | 湯沢北中 |
| 14. 新山付近の砂丘の研究 | 本荘北中 | 35. 振り子について | 山田中 |
| 15. 本荘市に見られる鳥の研究 | 本荘南中 | 36. 水の電気分解 | 稲川中 |
| 16. カエルを中心にした食物連鎖 | 石沢中 | 37. わが校の気象観測 | 須川中 |
| 17. 石沢地区の水生生物と水質について | 〃 | | |
| 18. 太陽黒点の観察 | 直根中 | | |
| 19. 化石を含む岩まなこ地層について | 上川大内中 | | |
| 20. ヒドラの反応について | 大曲中 | | |
| 21. ヤナギの葉茎と根のでかたについて | 〃 | | |



- | | |
|-----------------------------|----|
| 9. 由利海岸の海藻の化学成分の研究(第二報) | 本荘 |
| 10. 男鹿半島における地震被害の特徴と2, 3の考察 | 男鹿 |



＝ 高等学校の部 ＝ (11月9日)

- | | |
|----------------------------------|-----|
| 1. 本校周辺の高陸風について | 秋田南 |
| 2. 貝ガラムシについて | 〃 |
| 3. 手形山の鳥相 | 秋田 |
| 4. 日本海中部地震における能代・山本地方の震度分布に関する研究 | 能代北 |
| 5. コダカラベンケイソウのムカゴに関する実験 | 由利 |
| 6. 半導体の光に対する反応について | 角館 |
| 7. 田沢町大沼の調査(そのII) | 〃 |
| 8. 秋田県沿岸部の地衣類 | 西仙北 |

昭和59年度 研修講座計画

研修講座の計画に当たっては、新しい学習指導法や経営方法等への対応、さらに県の目指す学校教育の方向等をとらえ、教員の資質の向上をねらいとした。特に時代の要望に添う課題の解決や今日的要求を取り入れた講座内容を検討し、一層の充実を図るよう努めている。

次に59年度の研修講座実施上、58年度と比して変更のあった主な事項を紹介する。

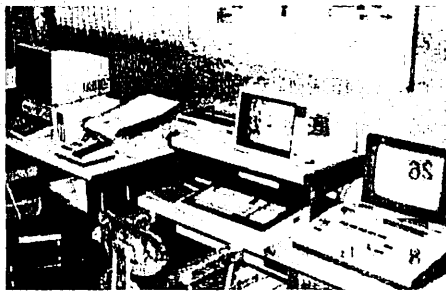
1. 新設した講座

(1) 教育機器実技研修講座(小・中・高合同)

教育工学的手法による指導法の改善は、近来一層の充実が望まれている。今回はリスフィルムによるTP制作とスライド制作を取り上げて新講座を開設する。

(2) マイコン初級研修講座(小・中・高合同)

58年度は入門コースを開設して好評を得たが、59年度より初級クラスの講座を新設する。入門コースと共に活用いただきたい。



2. 義務教育課より移管される講座

58年度まで義務教育課で主管していた講座のうち、次の3講座が教育センターに移管された。

(1) 小学校実技都道府県講座

(2) 中学校教科担任教員研修講座

(3) 中学校進路指導研修講座

3. 名称の変更になる講座

講座名が分かりにくいということが以前より指摘されていたが、59年度より大部分の講座の名称を分かりやすいよう変更する。内容が大きく変化したのではないので留意してほしい。名称や内容については、後日各校に配布される「講座案内」を参照されたい。

4. 講座開始時間の変更

従来第一日目の開始時間が10時になっていたが、連絡列車等を勘案し、9時30分とする。第二日目も同様9時30分開始となる。終了時間は従来通りである。

3月下旬に、各校へ「講座案内」を各2部ずつ配布するので、受講に際しては、十分活用してもらいたい。なお、希望講座への積極的な参加をお待ちしている。

昭和58年度 随時研修実施状況

近年、「多様化に応じた教育」という言葉をよく耳にし、また、「一人ひとりが生きる教育」という言葉を用いる機会も多い。それだけ、より多岐にわたる専門的な指導力が要求され、それぞれの実情に応じた地区研究会や校内研修が一層高く評価されるようになった。当教育センター、特殊教育センターでは、これらの地区研究会や校内研修会の要請に協力するほか、随時研修を受け付けることによって、研修成果の向上の期待に応えている。今年度はこの「随時研修」だけで9回、延15日、360名の研修が行われ、昨年度に比べ大幅に増加した。

主な内容を整理して次に紹介する。

1. 教育工学に関する研修

○指導プログラムの作成 (大館市教委)

○形成評価 ○観点別評価 (阿仁町教育研究所)

2. 教科または教科外活動に関する研修

○家庭科ホームプロジェクト研究(高校家庭科クラブ)

○家庭科技術検定評価法(高校家庭科技術検定事務局)

○特別活動の計画と実践(秋田県特別活動研究会)

3. 生徒指導に関する研修

○登校拒否児の指導(田代町生徒指導連絡協議会)

○児童理解の方法(鷹巣町西小)

○心に問題をもつ児童生徒の理解と対応

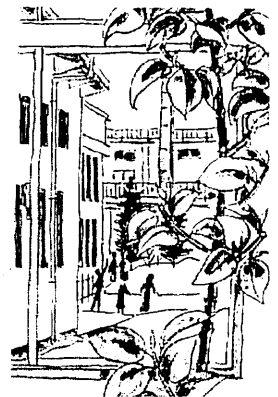
(学校保健会山本支部養教部会)

4. 特殊教育に関する研修

○特殊教育に対する理解(河辺郡校長会)

編集後記

研修講座以外の本年度の活動を中心に編集しました。日頃、より開かれたセンターを目指しています。この号をご覧になり、当センターをどしどし御活用下されれば幸いです。



教育センターだより 第32号

発行年月日
編集発行者

昭和59年3月21日
秋田県教育センター
秋田市仁井田緑町4番2号